慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	週刊新聞『大衆運動』総目次と解説
Sub Title	The contents and comments of the "Taishu Undo"
Author	中村, 勝範(Nakamura, Katsunori)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1962
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.35, No.6 (1962. 6) ,p.85- 98
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19620615-0085

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

資料

週刊新聞『大衆運動』総目次と解説

中村勝範

一

週刊新聞『大衆運動』は大正一〇年五月二一日にその創刊号を発行し、同年八月三日の第一〇号をもつて終刊となつた。毎週土曜日に発行していた。横二六・五糎、縦三八糎、毎号八頁で、第八面は広告面であつた。編集印刷人は終始小栗慶太郎、発行人は最初神永文三であつたが、後獄に下り（六月七日）第八号から山本智雄にかわつた。発行所は東京市本郷区千駄木町五五番地の大衆社であつた。

執筆者は高畠素之、北原竜雄、松永文三、小栗慶太郎、山本智雄、高野松太郎、中山啓、松延繁、田島時雄らが主で、その外に松本淳三、室伏生（高信）、坂上竜、房前市三（関東労働組合理事）、白石俊夫（全国土工組合理事長）、尾崎士郎らの名前がみえる。

二

『大衆運動』の主張は、第三号および第四、第五号（第四、第五号では傍点の部分が伏字になる）の冒頭にかかげられた短文のなかに要約されている。その全文はつぎのとおりである。

大衆運動は社会主義運動の一形態である。議会運動を冷嘗し組合運動を尻目にかけつゝ全プロレタリアの生活其の儘を運動の主体とし政治的直接行動を運動の中心とする。

運動の第一期に於て思想宣伝の唯一途を歩み第二期に於て思想の外部的躍動を促進する。大衆運動の最終的使命は実に此の部分の運動に含まれる。

右の宣言的な文字を念頭におきつつ『大衆運動』の思想について分析しよう。創刊号巻頭の、二行にわたる主題がそつくり削りとら

れている北原の論文（『大衆運動』の創刊語）によると「大衆運動とは、大正八年の夏過ぎ、労働争議が日本に於て全盛を極めた頃、我々の考えた社会主義運動の一つの形態であつた。週刊新聞『大衆運動』は、直接に間接に此の思想を提唱する為めと此の思想に基く自分等の諸運動の旗印とする為めとに創刊する」とあり、『大衆運動』の使命が記されている。

北原論文はつづけて、総罷工主義と議会主義とを否定する独自の立場をつぎのように主張する。従来大多数の社会主義者によつて考えられていた社会主義運動には二つの形態があつた。しかし「労働争議を基礎とする、総罷工主義も、オイソレと承知が出来なくなつた」し、議会主義は「非常な長時間の運動を継続しなければならぬ事は明かで、道中の余りに長かりそうなのを思つて我々は其の当時もうウンザリして居た」という。以上の理由によつて総罷工主義も議会主義も否定するのである。

議会主義を否定する考えは、明治時代の幸徳秋水の思想のなかにあらわれ、その系譜をひく者は大正時代に入つてもこの思想をより徹底的に展開していた。だから大衆社の同人が議会主議否定をとなえても珍らしいことではない。しかし幸徳以降、議会主義を否定する者はゼネ・ストによる社会主義革命を説くのが常であつたが、大衆社同人はゼネ・ストをも否定する。それはなぜであろうか。その理由は彼等がこの頃の労働運動を眼のあたりに見て、それにたいする期待を失つたからであつた。労働組合の連合団体である労働組合同盟会が成立したのは大正九年五月であつた。労働者の意気は大いにあがり、彼等は「労働運動に加わることによつて、自分等の階級が完全に開放され得るものと信ずる傾向があつた」（神永文三「組合の分裂」第二号）「しかるに、罷業は再三再四繰返されたけれども、それ等の組合運動によつて労働者の解放と云うことは微光だに認められないことに、労働者は気がついて来たのだつた」（右同）という。

労働者の解放の微光だにあらわれぬ理由は二つあると彼等は考えた。一つは高畠のいう「消費者としての労働者と生産者としての労働階級との利害は容易に一致するものではない」（「消費者本位の大衆運動」第二号）ということである。その説明として電車の従業員組合が賃銀増加を要求してストライキをした場合、当局はそれを容れると同時に、他方において電車賃値上げをするからプロレタリアは電車従業員の利益のためにかかる負担の犠牲とならねばならぬ。それのみでなく、ストライキ中にも一般プロレタリアはいろいろな不利益を受ける。「要するに、生産者としての労働運動は、生産者それ自体としての運動でない限り、生産者とは云うものの実は職業運動或は精々産業運動であつて、純真の意味に於ける階級闘争とは申されぬ。党中党を立て、階級中階級を立つるものである。階級総

合ではなく階級分割である」（右同）。ここに労働組合主義そしてゼネ・ストに反対する第一の理由があるというのである。

いま一つの理由としては、労働組合運動は自己の幸福を増進させようというもので、結局労働条件、生活条件の改善運動に終始する。それが成功すれば「其の革命的情熱を削る」ことになり、組合運動は本質的には反革命的なものとなる。これは現在のプロレタリアがプロレタリアたる境涯から脱却しようとするために自己の住む世界を造りかえることが急務であるとする社会主義運動とはまつたく次元をことにするものである。幸福増進の運動と社会組織改造の運動とは、本質上全く背馳するもので社会主義運動を主張するわれわれは本質的には組合運動の価値を否定するという立場をとる。以上は本質論である。しかし現在の組合員の心理の一部には「資本主義生産に対する戦闘的憤激の心理」がある。この心理が幸福増進の欲求に結びつく時は、もはや冷静なる自己の幸福のみの追求者ではなくて、超打算性を帯び本質上組合運動とは交渉のないものになる。つまり論者は、超打算の情熱は社会主義運動に転化するといいたいらしいが、その点をはつきり表現できないでいる。組合運動から社会主義運動への転化は、労働組合の側からいえば組合内に「不純物」が蓄積されたときに可能である。だから彼等は、「組合運動の中に含まれたる不純物（組合の本質より見れば）は、吾々の最も尊重しなければならぬ者である」とされていた。「斯くて労働組合に対して吾々は、本質的には価値を否定しつつ、現実的には価値を肯定すると言う、一つの矛盾せる立場に陥つた」のである（北原「組合運動の肯定と否定」二号）。

現実の組合運動には矛盾せる立場にあつた彼等であつた。彼等は組合運動は職業あるいは産業によつて個々の組合を分散せしめ孤立せしむるので全プロレタリアの一元的団結を妨げるという見解から組合運動とは別な方法で労働者を階級それ自体として結合せしめることを考えた。それは消費者本位の大衆運動という方法においてである。プロレタリア階級は一面において生産労働者であるが、他の一面において消費者である。生産者としては職業の種別、産業の部門によつて分裂しているが、消費者である点において全プロレタリアは一列に立つている。ゆえに全プロレタリア階級の一致した行動は消費者として立上る時において可能性をもつ。この点で大衆運動は消費運動である（前掲「『大衆運動』の創刊語」）。もちろん消費する者は労働階級のみではない。「資本家も消費する。地主も、坊主も、総理大臣も、女郎も、芸者も、猫も、杓子もみな消費する」（前掲「消費者本位の大衆運動」）。したがつて消費者は労働階級に特殊の性質ではない。しかしここで問題になるのは消費するには金がいる、誰も消費するが、しかし誰もが銭を持つているとは限らないの

である。ここで「労働階級の最も著しい特徴は無産者、無資力者、無銭者たる点に存する。換言すれば、労働階級は一の消費階級ではあるが、実は消費不能階級だと云うことになる。労働階級は斯く消費不能的消費者として見る時、初めて其階級的利害は直接総合的に一致するを得るのである。我々が電車従業員の罷業騒ぎよりも、電車賃値上に反対して立つ市民の大衆運動に、より純真なる階級闘争の発露を眺むるは之れが為である」（右同）。労働組合は組合員の労働条件改善を購う営業的運動としては一見有効なるように見えるが、プロレタリアのヨリ遠大なる歴史的使命を全うすべき階級的運動としては大して値打あるものとは考えないのであつた。

とにかく彼等は議会主義も労働組合によるゼネ・ストにも反対であつた。このとき「思い浮かべた運動形態が、即ち大衆運動――若し前の二つに並べて主義と言う字を付けるとすれば、大衆主義――である」（前掲『大衆運動』の創刊語）「議会主義が議員に依ろうとし、総罷工主義が労働組合に依ろうとするように、大衆運動は全プロレタリアが直接、運動の主体となる事を主張の出発点とする」（右同）。全プロレタリアの一人々々が資本主義生産に反対する思想を抱くことが運動の最初の条件である。全プロレタリアが反資本主義の思想で満たされたとき、社会はその思想にあてはまるようにつくりかえられなければならぬ。すなわち資本主義生産の崩壊となる、と彼等は考える。つづけて大衆運動は「面倒なる選挙の如き、窮屈なる組合組織の如き、上品な体裁のいゝものではなく、プロレタリアの特権たる野性と純真とがそのまゝ流動しそのまゝ凝結せるものであろう。新しい結社や、新しい組織を必要とするような、廻りくどいものでなく、プロレタリアの平常の生活形態そのまゝが、勇気と確信と（以下一〇字不明）し躍り出す」ものである。という（右同）。結社や組織がなくして運動ができるというのは、あまりにも空想的であるように思えるがどうだろうか。

大衆といい、あるいはプロレタリアといい、これを神聖視し、その自発性のみに期待して組織も統制も指揮もしないところはアナーキズムに似ている。アナーキズムは大正九、一〇、一一年にわたつて労働運動を風靡し、その運動はきわめて過激であつた。しかし「無政府主義の社会制度を維持するには、少なくとも、左の二条件中のいずれか一方が必要だ。即ち（一）社会の生活力が殆んど無限に発達するか然らずんば（二）人間の道徳心（愛他心）が非常に発達するかである」（「無政府論」第三号）。しかしこの二つは長期的に見ると見込があるが、「現制度の瓦解を、至つて近き将来に期待せねば満足できぬような性急者から云うと、斯様な事は殆んど問題にならぬ」のである（右同）。アナーキズムは社会の生産力が無限に発達するか、人間の道徳心が非常に発達しないと実現不可能であ

る。彼等は口では過激であり、性急であるが、じつは『悠長なる改革論者』（右同）にすぎないのであると彼等は考えた。つまり大衆社同人はアナーキズムには賛成しないわけである。

「大衆運動は、現在の全プロレタリアの有する、生活上の統一と組織との外形をそのまま支持して行く、此の統一と組織とに依りてこそ、大衆運動は無政府的なる原始生活に逆転せずに済む。此の統一と組織とに依りて、規制と秩序とを絶対の必要条件とする近世的集中生産を、破綻せしむる危険から免れる。生産力発達の最要の過程たる、分業と協業との進歩に動揺を起さない事が出来る」（前掲「『大衆運動』の創刊語」）。この点で大衆運動は国家社会主義と一致する。なぜなら「国家社会主義は、現国家の統一と組織との形式を支持せんとする事を特徴の一つとし、此の点に西洋かぶれの社会主義との差異を含むからである」（右同）。資本主義生産を否定する大衆運動は、いわゆる改良主義的な国家社会主義とも相違する。そこで大衆運動は「革命的国家社会主義」ということができると考えていた（右同）。「現国家の統一と組織」とを支持しながら反資本主義思想をいだいたとて一体どうなるのかと思えるのだが、この矛盾しそうな主張を真面目にとなえていたのが『大衆運動』である。

「規制と秩序とを絶対に必要条件とせる近世的集中生産」とか「現国家の統一と組織との形式を支持せんとする事を特徴の一つとし」とあるが、統一と組織との文字には、現国家の階級や資本主義の意味も含まれているように思われるが、もしそうだとすると社会主義ではなさそうだ、という質問が読者から出た（「社会主義問答」第七号）。これにたいして高畠はつぎのように答えている。すなわち「資本主義的社会たると社会主義的社会たるとを問わず、統一を（ママ）組織とは社会存立の主要条件」（右同）である、とまずいう。なるほど言葉は同じ「統一と組織」だが、資本主義社会のそれと社会主義社会のそれとが同じ内容だと考えていたら間違っているといえよう。彼等は、「現存資本制度の裡に発達せる集中的生産」（右同）をそのままに移してくると社会主義制度の基礎になると考えていた。かような集中的生産は資本主義のうちに資本主義と共に発達するものだが、その発達はやがて資本主義の否定を意味する。なぜならば「生産の集中と云うことは生産の社会化を意味するに拘らず、資本主義は一面に於て領有の個人主義に立脚している。然るに生産の社会化が発達すればする程、それは個人的領有と一致しなくなるので、結局両者の衝突は領有をも社会化せずしては止まない、それが即ち社会主義です。つまり社会主義は生産の社会化と云う方面から見れば資本主義の肯定であつて領有の社会化と云う方面から見れば資本主義の否定となるのです。而して我々の主張する国家社会主義は、此生産並に領有の社会化に就て、現国家の有する統一と組織との形式を維持せ

んとするもので、普通マルクス派と称する社会主義者が一面に於て生産の集中、領有の社会化を主張しながら、他面に於て社会主義的生産の実現が直ちに国家を否定するかの如く説くのとは聊か趣きを異にしています」（右同）という説明をあたえていた。ここでいう「生産の社会化」という意味は曖昧であつてよくわからないが、生産が社会性を帯びてくるという意味ではないかと思われる。それにしてもわが国の経済は集中的生産の度をますます濃厚にしていつた。高畠の理論からいうと「生産の社会化」は急速に進んだはずである、しかるにこの結果は「領有の社会化」とならなかつた。逆に独占の傾向を強めていつた。具体的な事実においてこの理論は誤つていた。

「社会主義は生産の社会化と云う方面から見れば資本主義の肯定であつて領有の社会化と云う方面から見れば資本主義の否定となる」（右同）という論理では、資本主義は善と悪の両面をもつているから否定の行動にでれなくなろう。すなわち「反資本主義」とは口先だけで、行動面では資本主義に指一本ふれられなくなるのではないか。

「社会主義と国家主義とは水と油也。諸君の国家社会主義なるものは此矛盾せる両要素を結合せんとするものではないか。それならば徒労でしよう」（「社会主義問答」第三号）という質問にたいして高畠はつぎのように答えている。「ボリシエキズムの如き非国家的ロ吻に淫する社会主義でさえいざ実現と云う段になると矢張り国家主義になつて了う。今日ではブルヂオアが国家主義を利用して社会主義を圧迫すると云う形になつているので、社会主義者は兎もすれば坊主憎くけりやの譬通りブルヂオアと同時に国家主義までも否定する（丁度軍備や政治を否定するように）と云う傾になるのですが、それは間違いです。社会主義と国家主義とは決して水と油ではなく、背合せに接触して反対を向いているといつた形です」（右同）という。この答は「西洋かぶれを嘲笑する諸君だッて矢張り西洋かぶれではないか」という別の質問（右同）にやはり高畠がつぎのように返答していることと一脈相通ずるものをもつている。それは「西洋かぶれの社会主義者とは、西洋の社会主義、例えばボリシエキズムとか、サンヂカリズムとかギルド社会主義とか云うものを、西洋人の言つた通りの形で其儘日本に移植せんとする社会主義者のことです。夫等のものゝ研究も無論必要ですが、一面に於て日本自身の現実に対する批判と理解とが深刻に発動して居らねばなりません。斯る発動があればこそ、日本には日本流の社会主義を産み出そうとする努力が生じて来るのです。我々は此点に於て殆んど五里霧中を彷つているのですが、それでも斯る努力だけは真面目に持つているつもりです」というものであつた。

三

大衆社同人の資本主義観についてまとめてみよう。彼等は「反資本主義」を旗印にしていたことはすでに見てきた。「我国の政権は、官僚資本主義化と同時に、完全に資本的勢力へ移動し終つたのである。しかして彼等資本家階級が、今後面接すべき対抗勢力は勿論新興の社会主義的勢力、即ち無産階級に外ならぬ。資本階級と無産階級、即ち最も発達せる搾取階級と被搾取階級とは、我国に於てはかくして実察上明瞭に区分せられたのである」（松延繁「圧迫政策を迎う」第九号）という立場から当時の社会をみていた。「一体搾取と被搾取との関係は、完全に一方が＋（プラス）なる時は他の一方は－（マイナス）となる。例令ばこゝに二つの器があつて、それに各々一升宛の水が入つて居る場合に、甲の水を乙の器に入るれば、乙の器の水は甲の水が減つた丈増加する。即ち一方が増加せば必ず片一方は減るという事になる」として「搾取、被搾取の定則」を説明し、「両者の利害は如何なる場合にも一致しない」（以上右同）という階級理論も述べられていた。この立場から各地の労働争議、小作争議を毎号力をこめて報じている。

以上の点だけから見ると彼等は全面的に資本主義制度・社会を否定しているかに見える。しかし彼等はその反面で、「資本主義の美点を数えつつ」つぎのように言つた。「我々は資本主義を敵視しつゝも、資本主義に包蔵さるゝ幾多の美点長所を見逃す訳にはゆかぬ」（高畠「資本主義の美点を数えつゝ」第六号）。まず第一に資本主義は自由と秩序との調節において過去のどの社会制度より卓絶している。資本主義は一面において自由放任を許しているが、それによつて制度自体の放縦乱雑がないのは他面において営利を原則としているからである。国家社会主義も無政府主義も営利を否定するが、しかし営利を否定した社会制度において自由と秩序とはどうして調節せられるであろうか。「国家社会主義の制度に於ては秩序のために自由が犠牲にされて強制が蔓ることになり、無政府主義の制度に於ては自由のために秩序が犠牲にされて乱雑が跋扈することゝなる」（右同）「資本主義が自由と秩序との調節原理として営利を利用しつゝある巧妙さに就いては、資本主義から有益なる暗示を与えられることを否定することは出来ない」（右同）という。

資本主義の美点の第二点は資本主義は生産技術の進歩に貢献するところ少くない。第三点として資本主義は世界的である。すなわち「資本の眼中には国家もなく、国境もなく、人種もない。たゞ営利と云う画一普遍の標的を追うて走るのである。」国民的色彩に染まりつゝある社会主義にくらべると遙かに超国家的である。資本主義は以上あげたような美点の外にもまだいくつかの長所がある。もちろん長所と並行して幾多の悪弊をもつている。いまかりにこの悪弊を無視するとしても、資本主義は自己の存立を直接脅威する所の一

大病源であるプロレタリアを内含し、そのプロレタリアは産業の集中的傾向によつてますます団結的反抗を促進する。「角を矯めて牛を殺すと云うが此の一大病源を矯めて資本主義其者を生かす工夫はないか」（右同）といつてこの論文を結ぶのである。最後の引用文中の「一大病源」とは「自己の労働力以外には何物をも所有せざるプロレタリア」であることが、この論文の中ではつきりしている。そうすると資本主義を直接脅威するプロレタリアを矯めて資本主義そのものを生す「反資本主義」とは一体どういうものなのか。資本主義の美点の一つとして「自由と秩序との調節」があげられているが、それはなるほど過去の社会制度に比較するとすぐれていようが、社会主義とはそもそも資本主義の「自由と秩序」が欺瞞であり、似て非なるものであるという立場から出発しているはずである。その原点から誤謬をおかしている「革命的国家社会主義」とは結局「反資本主義」のポーズだけに終るのではないか。

四

『大衆運動』は一〇号を数えたのみで自ら廃刊した。廃刊の理由は金と人の不足による。とりわけ人手不足である。人手不足がなぜ生じたかといえば、それは同人間の結束が乱れたからであつた。「始めの二三号が出る迄は、可成り皆が緊張してもいたしまた努力もしていたのであるが、三四号目辺から、そろそろ同人の結束が破れかかつて来た。……条件の不足は努力で補うと言う始めの予定は、これですつかり崩れて終つた。……皆の努力が足らない酬いは顔面で、広告料は減り、売れ行きは減り、徒に下らない支出が殖えたりして、金の方もすつかり逼迫して来た」（慶「廃刊を告ぐ」第一〇号）。発刊にあたつては多くの同人の名が列挙されていたが、第五号を出すころには「誰も一枚の原稿も書いて呉れないような事さえあり、気の故か、此の人達は、お互に穏かでない目で凝視合つているようであつた。　…だが、この人達の凝視合う目が険しくなればなるほど、仕事の上の僕の負担が多くなつて行つた。…原稿から発送まで二人きりで」やるという有様であつた（智雄「『大衆運動』と僕」第一〇号）。原稿から発送まで二人でやつたとあるがこの二人とは小栗慶太郎と山本智雄である。なぜ結束がみだれたか不明である。はじめのうち原稿をよせていたが、その中に顔をださなくなつた人々に北原竜雄、高野松太郎、中山啓らがいる。この外にも同人に名をつらねながら一度もペンをとらなかつた者およびそれに類する者もいたはずである。しかし発刊にあたつては多くの同人の名が列挙されていたというが、『大衆運動』紙上ではその点について知ることができない。

週刊新聞『大衆運動』総目次

創刊号（大正一〇年五月二一日）

『大衆運動』の創刊語（註1）〔北原竜雄〕

英文記事

当然の応報〔ヒム〕

最近の出来事・・迷信は大本だけ〔竜〕・ユダ多し〔文〕・検事総長の言葉〔文〕・『新なる危機』か〔慶〕・露国に対して〔文〕・独逸新内閣〔文〕・鬱憤のやり場〔繁〕

世の中の日記・・炭坑主へ警告・日本鋼管の淘汰・文珠炭礦の解雇・小松炭鉱の大浸水・浸水後の馘首問題・婦人事務員協会創立・浅野造船所の淘汰・解散会社の職工騒ぐ・海上で怠業・労働合宿所開館・横浜船渠の馘首・苦学生デー（ママ）

露国の労働組合〈会社主義国家と労働組合に就て〉

万国時事・・インタナショナルの二潮流・露西亜と、ブルガリアの強制労働

消費者本位の大衆運動〈国家社会主義の一側面〉〔高畠素之〕

社会主義同盟大会〔文〕

農村問題（註2）

ハガキの反響

地下労働〈鉱夫生活の話(1)〉〔高野松太郎〕

お坊つちやんと山師〈建設者同盟の講演・十四日夜・三崎館にて〉〔慶〕

俺は知る

解剖台

階級論(1)・附記〔北原竜雄〕

鉱夫と麻生君〈鉱夫総聯合の解剖〉〔文〕

ホツとした麻生君

馘首職工の暴動起る〈大阪電灯罷工の経過を見て〉〔慶〕

労働祭（メーデー）の朝〔千葉武郎〕

大衆社から〔慶〕

第二号（大正一〇年五月二八日）

戦闘本能の囁き

組合運動の肯定と否定〔北原竜雄〕

大衆社から

英文記事

風々雨々〈時評〉・・純真なる無政府主義〔エム〕・反友愛派の将来〔エム〕『暴動化』の効果〔慶〕・英国の幇間はいやだ〔繁〕

惨死者の友より〔TI〕

世の中の日記・・表彰された労働者・船員罷業・阪部商会の職工罷業・人喰い機械・全員解雇・□民（不明）対消費組合・喰へぬ人・大食会の盛況・妖婦が何だ

過激派の見たクロポトキン（上）〔中山　啓〕

万国時事・・蔓斯科に於ける食糧分配額・波蘭（ママ）にたける生活費と賃銀調節・独逸に於ける職業組合と共産党・白耳義に於ける失業保険と職工の要求〔北原竜雄〕

階級論(2)

兵舎より街頭へ・・全プロレタリアに激す（ママ）（註3）〔陸軍砲兵中尉H生〕

ハガキの反響

組合の分裂〈排指導より非組合へ〉〔神永文三〕

跫音〔松本淳三〕

農村の問題・・米穀法実施

諸々の会合・・独逸革命の披露会・□□□□□・労働者同人相談会（題字不明）

解剖台

無責任！狡猾！鉄面皮！〈麻生久君の『足尾労働争議顛末』を読んで〉・附記〔慶—繁—竜〕

若耄碌

大正の九太夫〔松〕

学士様なら

鉱夫気質〈鉱夫生活の話(2)〉〔高　野〕

第三号（大正一〇年六月四日）

無政府論

幻滅〔啓〕

大衆社から

英文記事（註4）

風々雨々〈時評〉・・植原教授の『危険』・外国人の銭〔竜〕・□□□□□・社会主義と火（題字不明）

事〔文〕・今の内だ〔慶〕・三井に満鉄を食はす〔繁〕・心学道話梅雨の話・虚無主義者族生〔慶〕
世の中の日記・・社会主義同盟解散命令・盲目詩人の退去命令・過激派の金・藤永田造船の争議・横浜船渠の解雇・徳永ブラシ職工の罷業・住友伸銅所の紛擾・川崎鉄工の要求・内田造船(ママ)(ママ)鹹首・川口鉄工の罷業・陸車(ママ)将枝の失踪・摂津製油職工の要求・過激文字記入の紙幣・警察のお節介
過激派の見たクロポトキン(下)〔中山　啓〕
万国時事・・西牙班の社会党と第三インタナショナル・仏国共産党の組織・露西亜に於ける妊娠せる婦人従業員の保護
社会主義問答〔高畠・柿内他〕(註5)
栃木分監より〔高尾兵平衛〕
農村の問題・・農業労働回答・小作人組合法・群馬県下の豪農数・小作紛争和解・農村の金融逼迫(註6)
レーニンのグリムプス
夕陽
海幸あれ
瘋癲病院より
解剖台
階級論(3)〔北原竜雄〕
雅量か矛盾か〔北風子〕
兵舎より街頭へ・・兵権と民衆〈全プロレタリアに激す(ママ)〉〔陸軍砲兵中尉H生〕
ハガキの反響
親分子分〈鉱夫生活の話(3)〉〔高野松太郎〕
さすらひ〔文〕
暁鐘〔啓〕
六月の雑誌から・・西洋かぶれの老人〈解放〉・十年後の日本〈改造〉
『中外』の街頭飛躍
御交換を乞ふ
第四号（大正一〇年六月一一日）
指導者論〈ブローカーに関して一言しながら〉〔北原竜雄〕
英文記事(註7)
風々雨々〈時評〉・・資本主義の進行〔竜〕・珍品の感染性〔竜〕・悪銭とは露知らず〔慶〕・総勘定・下には下が〔慶〕・強盗しなを作る〔繁〕・『恐るべき』『危険』〔慶〕・無智のあどけなさ〔慶〕・びし〳〵やれ〔繁〕
義理を知らない神永
世の中の日記・・尾張電鉄従業員の怠業・住友伸銅所の争議解決・藤永田造船職工の怠業・労働者の走狗・横浜沖仲士の同盟罷業・借地人大会・小学生の不敬葉書・印刷局の共済組合・幌内炭坑の瓦斯爆発・牧師の不穏文書印刷・赤化運動の鮮人団捕はる・盲目詩人浦塩へ・露人の祖国復活運動・友愛会の組合同盟脱退・海軍工廠の民業化計画・現業委員聯合会
社会主義問答(註8)
万国時事・・仏蘭西に於ける労働者の管理・スコットランド独立労働党・食料品の個人受取禁止・労働組合の協同企業〈独逸〉〔福田生〕
右傾と左傾〈組合同盟遂に分裂〉〔慶〕
農村の問題・・農民同盟生る・日本の小作組合・兵庫常全の紛擾解決
ハガキの反響
出世免状〈鉱夫生活の話(4)〉〔高野生〕
偶詩〔千葉武郎〕
啖呵の一節〔酒場の大将〕
借家人の同盟〈あつけなかつた講演会〉〔譲〕
解剖台
階級論(4)〔北原竜雄〕
兵舎より街頭へ・・(註9)
瘋顛病院(ママ)より
新聞と雑誌から・・他山の石〈大毎〉〔慶〕・金持の雑誌〈中外〉〔繁〕・闘争の本能〈中央公論〉〔慶〕

第五号（大正一〇年六月一八日）
団体交渉権〔慶〕
時代相〔S・T〕

孤独　〔啓〕
大衆社から
英文記事
風々雨々（時評）・・誤てり、新婦人協会〔繁〕・計量宣伝と金持処分〔繁〕・自己広告の取締〔慶〕・時は金なり〔慶〕・生めよ殖せよ〔慶〕・紙幣と犯罪〔慶〕・お直の墓〔慶〕・只働きの教員〔慶〕・扇風機難〔慶〕
銀座の□□（二字削除）　（SK生）
世の中の日記・・罷業団の戦勝紀念・罷業飛火・油谷工作の争議解決・第三公益質屋・友愛会の改称・月島器械職工の要求貫徹・炭坑夫の暴行・悪家主の黒表・職業紹介事業講習会・警官三十名を告訴・俸給生活状態調査依頼
レニンの教育論　〔T　生〕
万国時事・・労農政府の農業受理・全国産主同盟会議〈仏国〉・土地買収〈チェック・スロヴアキア〉・芬蘭労働組合同盟と国際労働組合同盟〔福田生〕・新労働党の組織〈諾威〉〔多良丘〕・東洋人排斥主張〈米国〉
ロシア間答（ママ）　〔啓〕
農村の問題・・小作人保護法・米の買入・耕地と所有者・小作人の地位・地主の恩恵・御上の仕事
ハガキの反響
亡命生活〈マルクス夫人の手紙〉光を求めて　〔智　雄〕
銭湯気分　〔吉川人丸投〕
赤瀾会の講演会　〔孝　一〕
解剖台
関西労働不安・・藤永田造船・住友電線・宣伝ビラ撒布
資本家とブロカー　〔松　生〕
貧乏人と美　〔文　三〕
出世式〈鉱夫生活(5)〉　〔高　野〕
山峡通信　〔尾崎士郎〕（註10）

第六号（大正一〇年六月二五日）

資本主義の美点を数へつゝ　〔高　畠〕
過渡時代　〔慶〕
大衆社から
英文記事
風々雨々（時評）・・「親切が仇」か・安価な保健食・五月の郵便貯金・金時計の蔭に・猫いらず・東電告発さる・「優しい」お茶の会・老遁相の御心痛〔以上八項、慶〕・屈辱より死だ！〔智　雄〕
東京監獄より　〔神永文三〕
世の中の日記・・奉天煉瓦工場の苦力罷工・不耕作同盟・坑夫の生涯・罷業団と警官隊の大乱闘・名古屋築港仲仕の動揺・友愛脱退真相発表・腕一本二万円・荒畑君下獄
共産主義同盟〈インターナショナルの史的研究(1)〉　〔山堂生〕
□□□□（題字削除）（註11）
万国時事・・児童保護国際会議・ベトログラードに於ける産業改造〈露国〉・製造家とオープン・ショップ〈米国〉・海員に対する賃銀低減要求〈米国〉・協同事業の進歩〈丁抹〉・従業員の要求拒絶〈伊太利〉〔曽幹勲〕・浦塩奪回の計画〈露国〉
古代日本の社会階級　〔坂上　竜〕
農村の問題・・小作組合の目的・不耕作同盟・小作制委員会・郡制廃止に伴ふ打撃
瘋癲病院にて　〔Y・S〕
夜霧　〔啓〕
心臓　〔時　雄〕
巷の盲人
何うするか？〈独逸ポスター展覧会〉　〔時　雄〕
解剖台
白熱化した労働争議・・鮮血淋漓〈藤永田の罷業〉・入門拒絶〈住友鋳鋼の争議〉・遂に罷業か〈住友電線の争議〉・殺気横溢〈住友製鋼の争議〉・築港不穏〈名古屋の仲仕動揺〉・半ば怠業〈桟橋造船の争議〉・閉鎖！解傭！〈内田造船騒ぐ〉
テロの夢　〔智　雄〕
獄苦しいお館〈鉱夫生活の話(6)〉　〔高野生〕

街上から　〔島田芳文〕
批評と紹介・・梅雨期の日本〈改造〉・藤十郎と富蔵〈社会講談〉・不景気と労働者〈正進〉・□□(伏字)戦の本城〈法廷より社会へ〉〔以上、時雄〕

第七号(大正一〇年七月二日)
社会政策の全盛時代〔時　雄〕
片々　〔北　邨〕
要は飢餓的賃銀制よりの解放にあり
精算の時　〔北　邨〕
大衆社から
風々雨々（時評）・・不埒な交換手〔週〕・「清浄第一」〔慶〕・当世女気質〔周〕・裏に裏あり〔慶〕・寄附と揉み消し〔慶〕・冗談ぢやない！〔慶〕・多数の声〔慶〕
静岡から　〔海野　潔〕
世の中の日記・・藤永田復た一揉め・商業使用人の週休制・不景気知らずの川崎造船・職工の失職者数・横暴家主の機関・清津爆弾事件の共謀者・坑夫七十名辛うじて出坑　〔高　畠〕
社会主義問答
万国時事・・愛蘭共和国承認・禁酒法修正決議・列車脱線して爆弾を見舞はる・露国対リトヴィア宣戦・東部西伯利不穏・依然愛蘭高圧・労働独裁制否決
古代日本の社会階級(一)　〔坂上　竜〕
農村の問題・・頻発する小作争議・卅町歩を地主に還す・食糧局躍起の調査・地租免除の陳情・毒瓦斯で農作物枯死
組合運動と農民運動　〔岡弥次兵衛〕
無題〈虐げられる者より〉　〔S　生〕
目の光　〔北　邨〕
仲間入りの夜　〔北　邨〕
借家人の法律相談所〈東京借家人同盟起らん〉　〔M〕
東京監獄より
解剖台　〔神永文三〕
暗雲低迷の労働界・・大風一過〈藤永田造船〉・罷工敢行〈住友製鋼〉・切崩し無効〈住友電線〉・同情罷業か？〈住友伸銅〉・交渉断絶〈相沢造船〉・硬軟分離〈三菱内燃工〉・全部解雇〈橋本鉄工所〉・応援決議〈機械労働組合〉・半怠業〈小野鉄工所〉・御用組合打破〈砲兵工廠〉
死の候補者〈監獄部屋の話(1)〉　〔田島時雄〕
何事
坑夫虐待事件〈長崎からの手紙〉　〔河野重信〕
七月の雑誌から・・左傾の租税政策〈解放〉・独立自尊と社会改良〈野依雑誌〉・「無害の遊戯」〈解放〉

第八号(大正一〇年七月九日)
組合運動と反抗的精神　〔慶〕
当然の事なり　〔北　邨〕
風雨を捲け　〔北　邨〕
大衆社から
何とも知れず　〔田島時雄〕
Women's Societies
風々雨々（時評）・・鉄道者の人耗し〔慶〕・廻し者の悲鳴〔慶〕・支那の貧児〔慶〕・動物愛護の宣伝〔慶〕・犬の喧嘩に過ぎない〔北邨〕・簡易売名法〔北邨〕・貴族化か民衆化か〔慶〕
東京監獄から　〔文　三〕
世の中の日記・・電車従業員判決・人権蹂躙の告訴提起・国境鮮人猶ほ不穏・下谷製作所の労資争議・店員週休問題反響・坑夫八百名を解雇・伊藤製鋼所・争議職工を黒表に・炭鉱益々不況
第一インターナショナル〈インターナショナルの史的研究(2)〉　〔O・S〕
万国時事・・英首相の対愛蘭態度・愛蘭議会開かる・先づ根本的に統一せよ・炭坑罷業解決・過激派聖地を脅かす・黒竜州討伐・烏蘇里駅占領
各地の労資闘争・・主謀者解雇〈住友一段落〉・要求受理されず〈川崎造船愈々怠業〉・怠業中の三菱〈職工側形勢

不利〉・神戸労働団体の結果〈その勢力や頼むに足らん〉・怠業罷業頻発〈大阪の大小工場〉・紛擾解決す〈名古屋兵器製造所〉　〔伏字〕□□主義団の品評会〈暁民会対談会の一夜〉　〔繁〕
混乱！騒擾！〈友愛会大会の醜体〉　〔慶〕
片々　〔北　邨〕
疥癬　〔北　邨〕
愚論、巨漢、酒〈『無名』講演会の印象〉　〔時　雄〕
解剖台
古代日本の社会階級㈢　〔坂上　竜〕
農村の問題・・琴浦の小作人紛擾・獲物を携へて対峙す・琶琵（ママ）の増水で沿岸被害・利き過ぎて不作・万国農業労働会議顧問
噴火口上の無踏〔関東労働組合理事　房前市三〕
去勢術〈監獄部屋の話(2)〉〔全国土工組合理事長　白石俊夫〕
気味悪き静寂　〔北　邨〕

『大衆運動』総目次と解説

悲惨な土工の死〈猪苗代水電の惨死事件〉　〔白石生〕
社告

第九号（大正一〇年七月一六日）

圧迫政策を迎ふ　〔松延　繁〕
敵を頼るは愚なり之無かりせば　〔北　邨〕
大衆社から　〔北　邨〕
Wedeclare that Workers, Organize!
風々雨々（時評）・・酒に罪なし・閑暇階級の無能力・何れが先きか・近視か低能か・売り物買ひ物・怨めしけな行列・三万の大示威行列・去勢に限る・婦人の矯風宣伝〔以上、慶生〕
東京監獄より　〔文　三〕
世の中の日記・・刺された職工
絶命・京都友禅工の争議・藤永田復怠業・大欠伸で拘留三日・大阪専売局を警戒・禁酒反対の大示威運動・小作人の不作同盟・罷業職工全部馘首
過激派の自由社会主義大学　〔矢部生〕
万国時事・・極東宣伝運動・労農国からの出兵拒絶・希土戦況・露鮮人の大衝突・在露邦人総検挙・波斯の反英運動・印度の騒擾・英愛休戦の状態
間断なき階級戦・・復々警官隊と乱闘〈三菱内燃工強硬〉・争議遂に拡大・頭脳労働者遂ひに起つ〈俸給者の団体運動〉・瓦斯大森工場罷業〈示威運動と官憲の圧迫〉・更に新要求を提出〈藤永田職工強硬〉・四万の大示威行列〈神戸労働聯合会の快挙〉・千五百名の失業者〈労資争議の犠牲者〉
仙台からの通信　〔西脇　穫〕
棚橋君を送る　〔北　邨〕
常暗の中に　〔北　邨〕
長男　〔智　雄〕
〔伏字〕「□□情熱のまゝに」〈組合同盟の講演会〉　〔時　雄〕
解剖台
大化改新の回想㈠　〔坂上　竜〕
農村の問題・・欧米へ小作調査・減税運動・夏年貢全廃を迫る・小作返還者続出・新宮の小作紛争解決・小作米争議解決
百姓から百姓へ　〔北村静夫〕
脱走者〈監獄部屋の話(3)〉　〔全国土工組合　白石俊夫〕
暴風雨来る（註12）　〔北　邨〕
大行列に加つて　〔倭文雄〕
伊太利に於ける新工場管理法の原案
隠れ家より　〔慶〕

第一〇号（大正一〇年八月三日）

廃刊を告ぐ〈破綻の後を顧みつゝ〉　〔慶〕
軍備とは如何　〔北　邨〕
大衆社から
A Letter of F. Lassle to K. Marx
風々雨々（時評）・・工場管理の宣言・資本主義の脅威・協調運動の全盛・我が子を質に・誰の罪ぞ・簡易食堂と公設市場・労働者とラッ

セル〔以上、慶〕・ドラッグの睨み合ひ〔無名氏より〕・糞も味噌も〔時雄〕
静岡より　〔海野潔〕
世の中の日記・・山口県都濃郡富田町・坑夫の生埋・性教育を教授す・白骨の行方を報ず・職工代表発狂す・露国らしい強盗・我子を抵当に・麻生等拘引
国家の発生と其職分　〔智　雄〕
万国時事・・チタに大罷業・セ・カ両軍衝突・エル・エル党勃興・全露総動員・社会党大会・印度暴動・暗黒化の市俄古・墨国革命の損害・貴州の饑餓
『大衆運動』と僕　〔智　雄〕
降参　〔高　畠〕
涼み台　〔慶〕
『週刊論者』より　〔慶〕
終刊気分
憧憬と幻滅〈獄中の神永文三に送る〉　〔小栗　慶〕
片々　〔北　邙〕
決心　〔北　邙〕
東京監獄より　〔文　三〕
解剖台
大化改新の回想(一)　〔坂上　竜〕
農村の問題・・続々たる小作人の転業・不作同盟・自作農漸減・農民一千名騒ぐ
購読料の清算に就いて　〔大衆社〕
雑信二片　〔兵庫Y生〕
夢想家の遊戯〈『工場占領』に就いて〉　〔田島時雄〕
ねあせ　〔河合満信〕
遠慮無く願ふ　〔仙台穣生〕
ロンドンから　〔室伏生〕
葉書其のまゝ　〔校正係〕
終刊号の終り　〔慶〕

(註1)　これは副題であって、主題は削られていてわからない。文中一〇行ほど削除。
(註2)　「ハガキの反響」は四、六、七の各紙面の三ヵ所にある。
(註3)　主題は削除。
(註4)　第一面に題名のない小文記事二つある。そのうち一つは高畠素之のもの。いま一つは解説で紹介した宣言的な短文。
(註5)　数名が質問し、高畠がこれに答えている。
(註6)　第四面に一記事全部削除のところがある。
(註7)　H. Maidako よりの手紙。
(註8)　題名なしの四行詩が第三面にあり。
(註9)　全文削除。
(註10)　第七面に小記事の全文削除あり。
(註11)　これは詩であるが、十三行中六行も削除されている。
(註12)　これは詩であるが、題と作者名以外は全文削除。